

# 寸 脇

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

第6号 1992.2

## 目 次

ちょっとおおげさでした？(後藤宗弘) .....	1
ソ連、見たまま、聞いたまま(武居能樹) .....	3
教官推薦図書 新しい学校消費者教育指導のために(堀田剛吉) .....	5
橋そしてエコロジカル・ライフ(井上 肇) .....	5
入退館管理システムの導入について(閲覧係) .....	6
1992年購入雑誌変更リスト .....	8
図書館関係会議など .....	9
図書館員から一言 棚橋みさ子 .....	10
山田 洋子 .....	10
お知らせ .....	10

## ちょっとおおげさでした？

後 藤 宗 弘

「情報理論」という科目がある。情報の理論であるならば、今流行の人工知能(AI)やニューロン、ファジイなどに関する基礎的な概念を扱う情報工学にとって大切な学問分野である、と考えるのは正常である。しかし、情報学や情報工学を研究するのに、この情報理論に含まれている分野が、すべて必須かというとそうでもない。

情報理論という名前は、C. E. Shannon という人が<sup>48</sup>1948年に米国のベル研究所の学術雑誌(B. S. T. J.)に発表した論文(A mathematical theory of communication)で議論した研究分野をいうために、当時つけられたものであり、今から考えれば、通信理論というほうが的確であったのかもしれない。

データや情報の確率的な生起頻度のみに注目して、情報量というものをエントロピー測度によって数量的に定義し、今ならだれでも知っている「ビット」なる量を明確にし、情報が数量的に扱

える対象であることを示したことが、当時は新鮮であり、そのインパクトを強調するために、通信理論ではなくて情報理論という、今から思えば、はなはだ漠とした名前をつけた理由のひとつは、ここにあるのではないかと思われる。

そのような名称が社会、特に学問の分野でもそれほど抵抗なく受け入れられたのは、一つには当時、情報に関する学問が現在のように発達することは誰も予想していなかったこと、言い換えれば、専門家の一部を除いてだれもそれほど注意を払っていないかったことがある。本来の情報というものの重要性は、終わったばかりの戦争と関係していた人達にすれば、十分に認識されていたのかもしれないが、当時は、明日食べるもの、冬の寒さを防ぐ衣類、エネルギー源となる石炭の方で頭は一杯の、もの不足の世の中であり、コンピュータ会社の巨人 IBM でさえコンピュータの分野に進出し始めて間もない時代であったから、腹の足しに

ならない情報を工学の対象にするのは、変わり者のすることとしか思われなかつたのであろう。

情報理論という名前を誤解する、あるいは真っ正直に受け取るということは、かなり最近でもあった。大学紛争華やかなりし頃、ある大学の学生自治会のスピーカから、「我々ハカリキュラムノ！中ニ！情報理論サエナイ！情報工学科ヲ！新設！スルノハ！断固！反対デ！アルウ！」という声を聞いた覚えがある。

情報理論を実際に習ったことのない学生が、学科の名前だけから誤解して、このように発言するのも仕方のないことかと、苦笑させられたことがある。情報理論など習わなくても、情報工学は理解できるのである。

しかし、今から考えると学生達もそんなことは百も承知で、反対するための口実としてだけこのことを使って、知らぬ振りをしていただけかもしない。なにしろ、大学には頭のいい人が多いから、何であっても口実さえあれば大声で反対して、相手の声を封じてしまえばいいと考えている人が今でもあちこちにいるのだから。というより、当時このやり口を覚えた学生が、そのまま社会人になったような人があちこちに見受けられる。これは余談。

情報理論が情報の量的な側面のみを扱っていることは先に述べた。情報の意味内容にまで立ち至った研究はこの分野では行われていない。しかし、その名前からは、あたかも情報の意味内容を研究するかのごとき印象を受け、意味を考えない情報の理論なんて無意味じゃないの、という非難も聞いたことがある。通信路、電話回線の容量をビットで表してみても、現在のように回線がディジタル化されていない時代では、それほど身近に感じられる理論ではなかったのである。

今、情報化社会と言われ、エネルギー、物質と並んで、情報が工学の重要な研究対象として扱われる時代になってみると、この情報理論という名前はいかにも大きすぎると思われるので、誤解の恐れのある場合には、シャノンの、あるいはシャノン流の情報理論、と言った呼び方をされて研究が進められている。

情報工学の分野も今ではかなり成熟してきてお

り、そこでは、学習、推論、エキスパートシステム、ニューロン、ファジー、人工知能など人間の脳の活動に近い事柄を表す言葉が使われ、それらを工学の対象とするようになってきた。このような言葉のみを見ていると、今すぐにでも人間の脳の替わりをする人工知能が、工学的に製造可能のように思われる所以であるが、これらも情報理論と同じように誤解を受けやすい名称ではある。そのような言葉で代表される工学の分野で、本当には何が研究されているのか、どんな方法論を用いでいるのか、を理解していないととんでもない誤解をすることがある。

誤解を恐れずあえて言えば、人工知能などという言葉でいわれているものは、人間の知能とは全く違うがいものなのである。これから100年経っても、人間の知能に比較できるようなものはできそうにないと断言できる。確かに、人間の脳はそこにある。原子、分子、神経細胞などいろんなものでできあがっている。それらの組織、活動信号伝達、各組織の役割がかなり明らかになってきてはいる。存在証明としての脳はそこにあるのだから、作れないはずはないと考えてもよいのであるが、今の情報工学で行っているのは、理論や枠組みが単純すぎるような気がするのである。

勿論、我々は本当の頭脳を作る事を目標にする必要はないのだから、今の情報工学が無用だと言っているのでは決してない。脳の一部の機能をまねする事ができる装置を作ればよいのである。ただ、専門家は内容を知ってて言っているのでよいが、素人を誤解させ、あるいは世間から注目を浴びるために、学問の分野でさえセンセイショナルな命名をすることがあるという事を言いたいだけのことである。

最近、バブルが弾けた、と言う言葉をよく耳にする。膨らんで風にゆられたアワが自然に弾けたようにいうこの言葉は、だれがそれを作つて膨らませ、だれが何をしたので弾けたのか、だれが得して、だれが損をしたのかなどと、人に考えさせないようにするために、賢い人が意図的にはやらせたと思えてしまうがない。

(ごとう むねひろ：工学部教授)

# ソ連、見たまま、聞いたまま

武居能樹

昨夏、あのクーデター騒ぎ直前の1ヶ月間、日本学術振興会の特定国派遣研究者事業により、ソ連レニングラードにあるソ連科学アカデミー・パブロフ記念生理学研究所のウゴレフ教授の研究室に出張した。彼は小腸の消化吸収の研究では私の先輩で、「膜消化」という考え方の提唱者として知られている。30年以上も前に出されたこの考えは専門分野では定説になっているが、高校の生物学の教科書には依然としてそれ以前の古い学説が採用されている。今回の訪問の目的は、小腸で食物が消化吸収されるとき、全体としてうまく働くように消化酵素と吸収系とがお互いにどのような連携をとっているのかという問題への手がかりを得る実験を組み立てることにあった。予備的ではあるが希望を与えるような実験結果を得て、今後共同研究を発展させようと約束をしてきたのだが、ソ連がこんな状態になってしまって、残念ながらこの約束は当分棚上げになりそうである。

あれからまだ半年も経たないので、この間の激変ぶりは私のさきやかな見聞を全く過去のものにしてしまった、といわねばならないのか。多分、そんなことはあるまい。政治・権力闘争で上の構造はあれこれ変わっても、解き放された人々の心の在り様を再び元に戻すことはできないであろうから。願わくば、宗教と民族の縛りから自由であらんことを。そんな思いを抱きつつ、短い滞在中に見聞きし感じた二、三のこと記してみたい。

パブロ夫生理研は1725年創設の帝室数学生理学研究所に始まり、現在の名称はパブロ夫の死んだ1936年に付けられた。パブロ夫のレーニン批評とそれに対する「パブロ夫の好きなようにさせよ」というレーニンの発言が記録に残されているという。ウゴレフ教授は若くしてパブロ夫賞を受賞して科学アカデミー会員となり、その後セーチェノフ賞、メチニコフ賞と、ソ連の医学界の3大賞を受賞した人物である。当然、国外から講演に招待

される機会も多かった。しかし、彼が社会主义国以外の国へ出ることができたのは1989年ヘルシンキで開かれた国際生理学会が最初であった（いくつかの会議記録集に、誰それによって代読されたとして彼の講演が収録されている）。彼はいう、「自分は自然学者だから科学賞は喜んでもらう、しかし、政治家ではないから政治的な賞はもらわない」と。なお、大衆向け月刊誌「科学と生活」の雑文に、「教授は60才、科学アカデミーの準会員は70才、正会員は80才まで長生きする」とある。

レニングラードの前身は18世紀初めにピョートル大帝が当初はスウェーデンへの守り、後に西洋への接近を願望して沼沢地に建設した都ペテルブルグで、この地は10月革命までの200年間ロシア帝国の首都であった。ロシアの文学や音楽に親しんだ者には懐かしい街だ（私の好きなチェーホフはモスクワだが）。北国の麗人と形容されておかしくない街、少なくとも20年前まではそうであった、という。しかし、今は街の至るところが「修復中」。民主改革派の指導者の1人としてしばしばその名が報道されるレニングラードの初代市長サプチャーカの選挙公約の1つが「街をきれいにする」であった。とはいって、有名なエルミタージュ美術館とその周りはきれいだし、あちこちの公園は身も心も休ませてくれる。街の中心から離れているので観光客があまり訪れないビスカリヨフ墓地は明るかった。この墓地には、第二次大戦中ドイツ軍に包囲されたレニングラードを2年半守り抜いて倒れて逝った60万の人々が葬られている。墓地のあちこちにおかれたスピーカーから葬送行進曲が流されていたが、私を案内してくれた女性はこれを聞くと嫌な気分になるという。理由は、ラジオもテレビも1日中この曲を流し続けたブレジネフの葬儀の日を思い出すから。「修復中」とは別に、街の景観を壊しているのがよく発達した公共の交通網だ。トロリーと路面電車の架線が

通りの上をみにくく縦横に走り、しかも、バス、地下鉄を含めてこれらの交通機関が汚れ傷んで、痛々しいのである。でも考えてみると、これは、これだけの交通機関が随分以前に配備された、それだけの力があったということだ。問題は、それを更新して行くだけの力が育たなかつたことにある。

レニングラード最大のデパート、ゴスチヌイ・ドボールは中心街ネフスキーダ通り（ゴーゴリの作品に「ネフスキーダ通り」がある）に面しているが、通りとの境目の一辺は板塀で囲まれている。例の「修復中」のためだ。その板塀にたくさんの壁新聞が貼られ、いつもその前に小さな人溜りが幾つもできていてペチャクチャやり合っている。ホテルで知り合ったロシア語の分かる日本人研究者によると、「議論の種は些細なことで、むしろ、他人とこんなにおおっぴらに議論できるようになったことを楽しんでいるみたい」。あたかも、戦後の日本のように。しかし、同じ上からの“民主化”でも、一方は敗戦で外からの力が大きかったのに対し、他方は国内の矛盾の激化が原因だから、国民の主体的条件の違いは非常に大きいだろう。レストランで4人掛けのテーブルで彼女と夕食をとっていると、40才前後のソ連人が「よろしいか」と横に座り、私達と同じ食事を注文する。しばらくして、英語で「日本人か」と話かけてきた。それ以後話が弾んで店が閉まる10時近くまで片言の英語とロシア語のチャンポンで駄弁った。おかげで、「こんなワインなんか飲めやしない」（実際、あの赤玉ポートワインよりもまずかった）と文句をいっていた彼女が私の分まで飲んでしまった。彼は原子力関係の研究者で、月給は1,000ルーブルという。平均の3倍以上である。「日本のマスコミ情報から予想していた以上に国民は激しく変化している」というのが彼女の感想。確かに、クーデターが報道された当初の日本の評論家達の発言には人々のこのような激しい変化を認識していないと思われるものが多かった。

彼女はソ連史研究者で、特に革命直後のソ連におけるユダヤ人問題を研究している。「これまで未公開であった多くの文献がグラスノスチのおかげで見れるようになった（もちろん、目録には載っているが未公開というのも多い）」と、毎日せつ

せと公文書館に通っていた。来た甲斐があったという。でも、ゼロックスもなく写真撮影も禁止（注意書を無視して写真を撮っていたら、シャッター音を聞きつけて来た係員が「ダメ」）なので、読んで要点を書き留めるか筆写しか手がないとぼやき、他方で、頁が抜け落ちても不思議でないほど本が傷んでいて修理されていないのを心配していた。20年代に出版された本が復刊され、その発売の日に本屋に行ったら既に長い行列ができていたそうである。

モスクワを案内してくれた民主改革派の青年が「クレムリンそばの中央展示館で2年前には想像もできなかった展示をしている。ぜひ見に行け」という。「アフガン戦争」批判の展示で、装甲車や壊れた戦闘機を持ち込んだ大規模なもの。戦争がいかに悲惨な結果を人々にもたらすか、痛感させるものであった。しかし、主催者がこの「人々」の中にアフガニスタン人も含めていたかどうか自明ではない。彼らがソ連による侵攻としてこの戦争を批判しているようにはみてとれなかったからである。湾岸戦争のとき、テレビが映し出す光の交差する夜空を美しいといった人々は、多分、その光の下で多くの人々が死に傷ついていることを想像できなかったのであろう。あるいはまた、「ソ連が東欧諸国を自分の衛星国にして云々」という私の発言に、生理研の研究者が猛然と「あんな小さい国々から何が得られるというのだ。大戦後ずっとソ連はこれらの国々を援助し続けてきたのだ」と反論したのが思い出される。

人々がレーニン像を引き倒す映像がテレビでよく放映された。それを見る度に思い出したのが今もレニングラードに残るツァーリの巨大な像である。プーシキンの叙事詩「青銅の騎士」に詠われて有名なピョートル大帝像はネバ河畔に立ち、ロシアに漂着した大黒屋光太夫を謁見した女帝エカテリーナ二世の像はネフスキーダ通りのそばに立つ。彼らは「偉大なるロシア」の象徴として10月革命を生き延びてきたのであろうか。果してレーニンは初の社会主義国家の建設を指導した偉大な人物としてその像をロシアの地に残すか。これは政治の問題であると同時に文化の問題でもある。

（たけすえ よしき：教養部教授）

## 教官推薦図書

教官から、その専門分野を専攻しようとする学生に先ず薦めたい入門書・基本図書、あるいは、より多くの教官・学生に教養書として是非一読を薦めたい専門図書を紹介していただいている。

### 新しい学校消費者教育指導のために

堀田剛吉

日本消費者教育学会という学会がある。これは四者（四者とは、企業経営者・消費者・行政担当者・学者）が納得のいく経済社会をつくることであり、これが家庭生活向上のみでなく、国の発展にもつながるという考え方である。しかし現実の社会では消費者は、数が多いがまとまりがなく、企業経営者に比較して知識水準も低いし、資本力も弱いというように多くの弱点をもつ。したがってよい社会づくりのために、賢い消費者教育に対する学校教育の対応が必要とされている。今回の指導要領（平成4年度から小学校から漸次）の改定では、国民生活審議会などから文部省への要望もあり、消費者教育の内容が家庭科を中心とした社会科などにも若干強化された。しかし教師のための指導書としてまとまった本はまだ多くはない。そこ

で日本消費者教育学会は同学会編で「学校教育のための消費者教育推進のマニアル」という本を書いた。これは第Ⅰ部は、理論編で学校教育における消費者教育の推進課題や新しい学習指導要領の内容や目標との結びつき、そこでつけるべき能力指導の方法や評価法が説明されている。第Ⅱ部は実践編であり、ここでは小・中・高等学校の家庭科・社会科・商業科における実践例を出した。また全体的に指導に活用しやすい参考資料も加えた。

平成4年4月頃に光生館から出る予定の本である。

教員になりたい諸君は勿論、他の学生諸君も現代社会の課題やその流れを知るなど、教養をたかめるために是非一読されたい。

（ほった たけよし：教育学部教授）

### 橋そしてエコロジカル・ライフ

井上 肇

土木の役割は、人間の活動の場を作ることである。これらのうちで、人と物の移動の際に障害になる川などに橋を架けることも必要になる。単に、「橋を架ける」と工学的に考える前に、我々の先人達が橋をどのように見ていたか、架けてきたかを知ることも必要である。これらについては日本の橋（保田與重郎、講談社学術文庫、1990）、日本人と橋（上田篤、岩波新書、1984）、日本の石橋（山口祐造・戸井田道三、平凡社、1984）、八百八橋物語（松村博、松籟社、1984）などがある。これらで、日本人の認識の中に、橋は道の「はし」であり、石橋が日本に少ないのは石にたいするものの考え方があるのではないかと説かれている。技術的な入門書としては、橋のはなしI・II（吉田巖、技報堂、1985）、橋のなんでも小事典（土木

学会関西支部、講談社、1991）がよい。構造全体については構造の世界—なぜ物体は崩れ落ちないでいられるか—（J. E. ゴードン、石川廣三訳、丸善、1991）がその基礎的な面をうまく解説している。

一方で、我々が構造物を作るとき、それが地球環境の破壊につながるおそれがあり、エコロジーなる概念が顔を出すことになる。この面に、エントロピーの概念を持ち込んで新しい共生の社会を作ろうと提案しているのが、君はエントロピーを見たか—地球生命の経済学—（室田武、朝日文庫、1991）、水土の経済学—エコロジカル・ライフの思想—（室田武、福武文庫、1991）で、工学を学ぼうするものに大きな示唆を与えるものであろう。

（いのうえ はじめ：工学部教授）

## 入退館管理システムの導入について

### 1. はじめに

科学技術の進展に伴って図書館の施設・業務にも新しい機器が次々と開発されています。本学でもこれまでに様々な機器を導入して図書館機械化の一環としてサービスの向上を目指し業務の合理化を行ってきました。今回導入いたしました入退館管理システムもその一つです。導入にあたり利用者の皆さん方のご理解とご協力をお願ひいたします。

### 2. 入退館管理システムとは

入館管理システムと退館管理システム（一般にブック・ディテクション・システムと言われています）で構成され、入館のチェック、入館者の種別統計の作成、資料の紛失防止など行うことができます。入館ゲートはコンピュータでコントロールされています。

### 3. 導入の経緯

1970年代になって、日本の大学図書館は資料の保存・管理の重視から次第に利用中心のサービスに転換するようになり、閲覧方式も閉架式から開架式を採用するようになってきました。

本学もいち早く開架式を採用してサービス向上に努めてきました。しかし、この方式は入館する時に学生証などの身分証明証を確認し、ロッカーを設け鞄・荷物など私物の持ち込みを制限したため、利用者にとって不便となり、入館手続きが煩雑となっていました。また、退館する時に資料の無断持ち出しを防止するために館員が絶えず注意を払わなければならず精神的な負担となっていました。そのためサービスと管理運営を両立できるような様々な方策が検討されてきました。

大学の統合移転に伴って昭和52年、附属図書館の基本方針が打ち出され、その一つに親しみやすい図書館、業務の円滑化を目指して新図書館に機械化の一環として入退館管理システムの導入が計画されました。しかし、建設段階になって入館管理と退館管理の両システムを導入することは金額面で困難となり、入館管理システムについては別に予算要求していくことで当初は退館管理シス

テムを主とした簡略型で稼働することになりました。医学部分館は昭和56年6月、本館は昭和57年9月の新築を機に設置し稼働いたしました。

この退館管理システムの導入により懸案となっていました利用者の鞄・荷物など私物の館内への持ち込みが可能となり、館員の出入口での精神的な負担からも開放されました。さらに館内ほぼ完全開架式となったことで、利用しやすくなり大学図書館の公開サービスも重なって開かれた図書館として学内外とも利用者が大幅に増えました。しかし、反面、入館をチェックする機能がないために運用面において利用者との間で様々な問題を引き起こすこともありました。

平成3年度予算要求してありました入館管理システム（一部退館管理システムの機器を含む）の設置が認められ、従来の退館管理システムと併設して全面的に入退館管理システムとして稼働することになりました。医学部分館は平成3年12月から稼働いたしました。本館は平成4年4月から稼働いたします。

### 4. 入館について

図書館を利用する際には、必ず図書館利用証（図1）（以下「利用証」という。）が必要となります。この利用証は図書を借用する時にも使用します。従来の利用証では入館できませんので新しい利用証と交換いたします。学生の皆さんには受付へ申し出てください。利用証をまだ持っていない方は、受付で登録を済ませていただければ発行いたします。

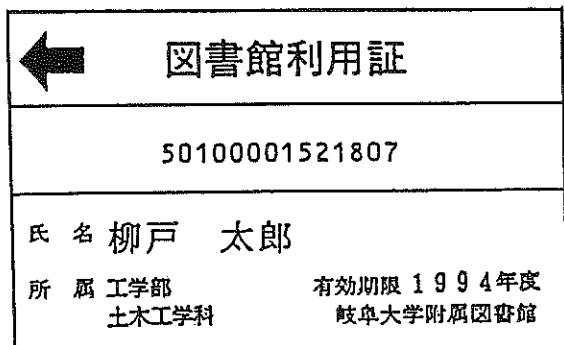


図 1 図書館利用証

入館方法は次のようにになります。

入館ゲート（図2）は通常ロックされていますので、ゲート右手前のポストの挿入口に利用証を差し込んでください。OCR（光学文字読み取り）装置で読み取りますと、利用証がポストの左下の取出口に出てきます。利用者コードが適正であれば緑ランプ（OK）が点灯して入館ゲートのバーがフリーになりますので、手で押して入ってください。緑ランプが消えると、バーがロックされますので注意してください。読み取りが正確でない場合はブザーが鳴り赤ランプ（NG）が点灯しますので、再度入れ直してください。再度入れても赤ランプが点灯する場合は受付にご連絡ください。

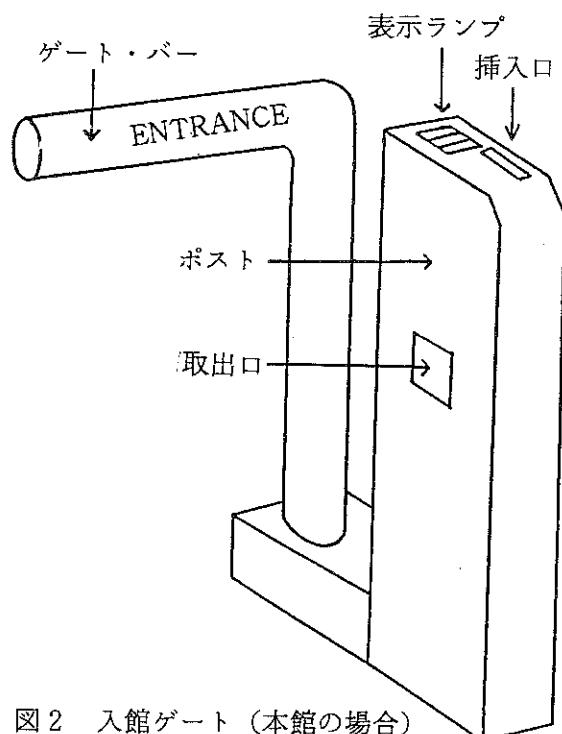


図2 入館ゲート（本館の場合）

#### • FAXによる文献複写について

FAXにより文献複写を申込み、FAXにより文献が入手できるようになりました。FAX料金は1枚40円（B4サイズ以下）です。

事情によってはFAXでの申し込みができない場合もありますが、FAXは郵送に要する日時が短縮できますので、是非ご利用ください。

なお、用事等で一時的に退館する場合も再入館の際に利用証が必要ですので、出る時は必ず利用証を携帯してください。

#### 5. 退館について

ブック・ディテクション・システムは図書紛失防止のために開発されたシステムで貸出手続きが済んでない図書が館外に持ち出されるのを防ぐためのものです。

通常退館ゲートのバーはフリーになっていますので手で押せば出ることができますが、貸出手続きを済んでいない図書を持って退館ゲートを通りますとセンサーが働き警報ブザーが鳴り、バーがロックされます。この場合は館員の指示にしたがってください。図書は必ず貸出手続きを済ませてから、館外に持ち出してください。

なお、誤作動で警報ブザーが鳴ることもありますが、館員が細心の注意を払って取り扱いますのでご協力を願いいたします。

#### 6. おわりに

図書館では利用者の皆さん方に迅速・的確なサービスが提供できるようにこれからも積極的に機械化を進めて行かなければなりません。そうすることで、図書館サービスの向上、効率的な管理運営につながることだと思います。入退館管理システムの導入で、今までの入退館とは多少異なり、当初は戸惑われることと思いますが、図書館の趣旨をご理解のうえ、利用者に親しみやすい図書館にするため皆様方のご協力を願いいたします。

（閲覧係）

#### 郵送の場合

複写料金=35円×枚数+送料

#### FAXの場合

複写料金=（35円+40円）×枚数

## 1992年購入雑誌変更リスト

## &lt;新規購入&gt;

誌名	配架	誌名	配架
いきいきジャーナル	病看学	Cognitive Linguistics	養英語
化学と教育	図化学	Designs, Codes and Cryptography	工情報
からだの科学	教体育	Deutsche als Fremdsprache	養独語
関節の外科	医分館	Deutsche Sprache	養独語
金属	教技職	Development	図生物
近代柔道	教体育	English Studies	養英語
経済セミナー	農演林	European Journal of Immunology	医病2
経済評論	教法経	Evolution Psychiatrique	医分館
健	教体育	Forest Products Journal	教技職
現代思想	図哲学	General Hospital Psychiatry	医分館
コーチング・クリニック	教体育	Geschichte und Gesellschaft	教史学
体育科学	教体育	Heteroatom Chemistry	図化学
トレーニング・ジャーナル	教体育	Historische Zeitschrift	教史学
肉牛ジャーナル	農農営	International Journal of Science	
日本語学	養日語	Education	教物理
農業経済研究	教哲学	Journal of Cell Biology	図生物
農林水産図書資料月報	農農経	Journal of Combinatorial Theory. B	工共通
パリティ	図物理	Journal of Immunology	医病2
へるめす	図哲学	Journal of Philosophy	養哲学
ユリイカ	図哲学	Learning and Motivation	図哲学
養牛の友	農農営	Linguistische Berichte	養独語
臨床スポーツ医学	教体育	Neurological Research	医脳外
労働科学	医衛生	Psychiatrische Praxis	医分館
労働科学	教体育	Psychological Medicine	医分館
Japanese Journal of Sports Sciences	教体育	Schizophrenia Bulletin	医分館
Nurse + 1	病看学	Shcola i Proizvodstvo	教家政
Swimming & Water Polo Magazine	教体育	Synthetic Communications	図化学
Acta Psychiatrica Scandinavica	医分館	Sport Psychologist	教体育
American Journal of Neuroradiology	医脳外	Talanta	図化学
Animal Learning and Behavior	図哲学	Theoretical Computer Science	工情報
Applied Animal Behavior Science	図生物	Transactions of the ASME. Journal of	
Cancer Causes & Control: C.C.C.	医分館	Turbomachinery	図機械
Applied Ocean Research	図土木	Zeitschrift fur Naturforschung. A	図化学
Biological and Cultural Tests for Control of Plant Diseases	農植病		

## &lt;購入中止&gt;

医学のあゆみ	医病2	週刊金融財政事情	教法経
ガーデンライフ	農園芸	細胞	図生物

誌名	配架	誌名	配架
食品衛生研究	図畜産	Encounter 廃刊	養英語
神経精神薬理	医分館	European Journal of Clinical Invest.	医分館
人類遺伝学雑誌	医分館	European Journal of Clinical Pharmacol.	病薬剤
脊椎脊髄ジャーナル	医分館	Excerpta Medica.	医分館
地質ニュース	養地学	Genetic, Social, and General Psychology Monographs	図哲学
東北数学雑誌	短数学	Hereditas	図生物
日本全国書誌	図二次	Industrial Education	教技職
日本農業学会誌	図農学	Information Sciences	図情報
免疫組織科学文献速報	医病2	Journal of Applied Electrochemistry	図化学
BASIC 数学	短数学	Journal of Chromatography	教化学
月刊日本の生物 (BIRDER)	農家繁	Journal of Exp. Psychol. Hum. Perc. Perf.	図哲学
ONCOLOGIA	医病2	Journal of the Less—Common Metals	図機械
Acta Informatica	図情報	Journal of Neural Transmission	医分館
Annals of Statistics	養数学	Journal of Neurology	医分館
Applied Mathematics and Computation	短数学	Journal of Police Science and Adm.	医分館
Australian Journal of Dairy Technology	図畜産	Journal of Psychology	図哲学
Automatica	図情報	Journal of Recreational Mathematics	短数学
Biological Abstracts	医分館	Journal of Steroid Biochemistry...	図化学
Biological Abstracts. RRM	医分館	Laser Focus World	図物理
Biopolymers	医生2	Marxism Today 廃刊	養哲学
Brain; Journal of Neurology	医脳外	Molecular Reproduction and Development	図生物
CA Selects. Electrochemical Reactions	工応化	Personality and Social Psychology Bulletin	図哲学
Chromosoma	図生物	Progress In Neuro—Psychopharmacology...	医分館
Clinical Chemistry	医臨検	SIAM Journal on Computing	図情報
Computer Aided Design	短計測	SIAM Journal on Numerical Analysis	短数学
Computer—Aided Engineering Journal (IEE)	短計測	Statistical Science	図数学
Computers and Mathematics with Appl.	短数学	Stochastics and Stochastics Reports	養数学
Current Mathematical Publications	養数学	Zoological Science (JPN)	医解1
Deutsche Zeitschrift fur Philosophie	短哲学		
Encephale. NS	医分館		

### 図書館関係会議（学内） 平成3年9月—12月

9. 4 第4回図書・紀要編集委員会  
 9.27 第62回附属図書館委員会  
 9.27 第6回附属図書館報編集委員会  
 9.27 第8回附属図書館資料選定委員会  
 11. 6 第5回図書・紀要編集委員会  
 11.29 第63回附属図書館委員会

### 図書館関係会議・研修（学外） 平成3年9月—12月

9. 4 岐阜県図書館協会評議員会・講演会  
 （於各務原市立図書館 館長他3名）  
 11. 8 東海地区大学図書館協議会(平成3年度第1回)  
 講習会（於名古屋学院大学 小林、黒柳）  
 11. 8 東海地区医学図書館協議会第18回実務担当者会議（於名古屋市立大学 宮崎）  
 12. 3 東海地区大学図書館協議会（講演会）  
 （於住友生命名古屋ビル 内海、波多江）  
 12. 6 東海地区医学図書館協議会医学図書館員研修会（於朝日大学 森他2名）

## 図書館員から一言

### 棚 橋 みさ子

図書館総務係にお世話になって、早くも1年半が過ぎました。文献複写等を受け付けています。学内・学外問わずお気軽に利用して下さい。ただし、私費の場合、小銭を持って。



図書館の整理業務、情報システムの多様に驚いている毎日ですが、魅力ある図書館になるよう館員一同が力を合わせていますので、少しでもお役にたてればと、私も、努力していくたいと思います。

(たなはし みさこ)

### 山 田 洋 子

世はまさにボーダーレス時代、利用者の研究領域は従来の垣根を越えてますます細分化され、研究方法も多様化の一途。参考調査係として早二年、DIALOG・JOIS・NACSIS・各種CD-ROM等、機械による情報検索、ILLシステム・文献複写依頼等、窓口業務を担当しています。効果的な図書館サービスの提供を心がけ“皆さんのが気軽に声をかけられる”そんな窓口にと願っています。

(やまだ ようこ)

## お 知 ら せ

- **学科コードの変更について**  
電算機更新に伴う図書館新システムへの移行により、平成4年度から学科コードが変更になります。資料購入の際には、新しい学科コードを記入してください。
- **医学中央雑誌 CD-ROM版のご案内**  
医学部分館に「医学中央雑誌 CD-ROM版、1989-1991」が入荷しました。現在国内で発行されている医学・歯科学・薬学およびその周辺領域の定期刊行物から採択された、年間約20万件の文献を収録しています。  
1992年以降は年4回の更新です。

## お 知 ら せ

- **CD-ROM版朝日新聞のご案内**  
本館に、「CD-HIASK'89」が近々入荷します。東京本社最終版から、1989年の約7万件の記事と1986-1988年の総索引が収録されています。  
先に購入済のCD-HIASK'90と併せてご利用ください。
- **明治・大正・昭和期教育関係新聞雑誌完全復刻版コレクションについて**  
上記コレクションが受入れ、整理されて3階に一括して配架されていますので、ご利用ください。

## 休館日のご案内

次のように休館日を予定しています。

- 毎月第二火曜日  
附属図書館では次の日も休館日となります。
- 3月25日(水)(卒業式・学位記授与式)
- 4月7日(火)(入学式)

## 平成4年6月末日まで

次のように夜間開館停止を予定しています。

附属図書館 3月2日(月)~4月6日(月)

\*図書館内の案内・掲示に注意してください。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第6号 1992年2月29日

編 集 委員長：大谷 熊 委員：佐々木栄英、津田雅夫、永田 拓、河田幸男、  
小林かず子、羽賀啓子

発 行 岐 阜 大 学 附 属 図 書 館

〒501-11 岐阜市柳戸1番1

☎0582-30-1111